成長した長身爆乳妹弟子に
柔術で絞め落とされて吊る
されて分からされちゃう

【目次】

第１章・・・・・・・・・・１頁目

第２章・・・・・・・・・・１９頁目

第３章・・・・・・・・・・６５頁目

第４章・・・・・・・・・１０７頁目

第５章・・・・・・・・・１５６頁目

第６章・・・・・・・・・１９５頁目

エピローグ１・・・・・２３８頁目

エピローグ２・・・・・２５６頁目

第１章

１

子供の頃から格闘技に興味があった。
テレビで放送される格闘技関係の番組―――そこで繰り広げられる男たちの戦いに胸を熱くした。
だから英雄が格闘技を始めたことは自然な流れだったのだ。
柔道とブラジリアン柔術。
英雄としてはブラジリアン柔術だけをやりたかった。
柔道教室にも通うことになったのは親の意向だ。
よく分からないマイナーなスポーツをやるよりも、メジャーな柔道をやったほうが息子の将来にとっては有意義だろう。そう考えた英雄の両親が、ブラジリアン柔術教室に通うための条件として、柔道教室に通うことも要求したのだった。

＊

英雄は熱心に練習に取り組んだ。
もともと同年代の男子と比べても身長が低かったが、そんなハンデがありながらも、ブラジリアン柔術教室での英雄の活躍はめざましかった。
小さな体をいかして、機敏に動き、フェイントを重ねながら相手の首や関節を狙っていく。相手がたとえ自分

より大きな体であっても、工夫次第で勝利できるという感覚に、英雄は夢中になった。めきめきと頭角をあらわしていき、中等部にあがったころにはブラジリアン柔術教室の指導役に抜擢された。尊敬する師範から、教室に入ったばかりの初等部生徒たちの指導役に選ばれたのだ。

＊

初等部の生徒は基本的に言うことをきかない。
やんちゃで、すぐに集中力をなくす。
それでも、強さに対する憧れをもっていることは自分と同じで、英雄は熱心に初等部の生徒を指導していった。
指導にあたっては自分が今まで感覚でやっていたことをわかりやすく言葉にすることが必要で、英雄にとっても勉強になった。
やんちゃで元気だけがありあまっているような少年たちを指導するのは大変だったが、面倒見のいい英雄は根気強く彼らに向きあった。乱暴そうな少年たちも英雄の強さを知るにつれて言うことを聞くようになり、ブラジリアン柔術教室の初等部クラスは盛況となって、毎日やかましい日々が続いていた。

＊

　そんなある日、気弱そうな少女がブラジリアン柔術教室に入会してきた。
　富山明日香。
　それが少女の名前だった。
（なんでこんな子が？）
　明日香を一目見て、英雄は疑問に思ったことを覚えている。
　目の前の少女はとても小さかった。
　気弱そうで、現に教室に現れてからというもの、ずっと涙目になって、眉を下げっぱなしだ。
　とてもではないが、格闘技に興味があるとは思えない。
「どうして、ブラジリアン柔術をやろうと思ったの？」
　英雄が問いかける。
　すると、少女が、
「パ、パパが」
「え？」
「パパが、体をきたえるためにかよえって」
　両親から言われて嫌々通わされている。
　そういう子供も少なからず存在する。
　けれども、英雄としてはそういう子供も大歓迎だった。きっかけがどうであれ、ブラジリアン柔術のすばらしさを知って欲しい。英雄はおびえている明日香にむかってニッコリとほほえみながら言った。
「大丈夫。怖くないよ」
「……」

「少しづつやっていけばいいんだ。今日は簡単な動作からやっていこう。基本的なことだけど、この繰り返しが大事なんだ」
「は、はい」
　明日香への指導が始まる。
　これまで運動をあまりやっていなかったようで、明日香の動きはお世辞にもいいとは言えなかった。
　けれども、英雄の熱心な指導のおかけで、明日香もブラジリアン柔術の楽しさを感じるようになっていった。涙目ではなくなり、表情にも生き生きとしたものが浮かぶ。
　明日香も英雄を慕うようになり、英雄のことを「師匠」と呼んでなつくようになった。師匠はやめてくれと英雄が言っても、「師匠は師匠です」とかたくなに呼び名を変えてくれない。師匠と呼ばれて、英雄はどこかこそばゆい気持ちになりながらも、誇らしさも感じていた。
　指導と練習が続く。
　まだまだ教室内では誰にも勝つことはできず、誰よりも弱かったが、明日香は日々まじめに練習に取り組んでいった。

　＊

「うん。だいぶ上達したね、明日香」
　道場での練習後。
　肩で息をして汗だくになっている小柄な少女を見下ろ

しながら、英雄が言った。
「ありがとうございます。これも師匠のおかげです」
　にっこりとした笑顔。
　かわいらしい少女のほほえみ。
　楽しそうにしている明日香を見て、英雄もほんわかとした気分になった。
「師匠のおかげで、ブラジリアン柔術が好きになりました。体を動かすのも気持ちがいいです」
「いや、僕のおかげとかじゃなく、明日香ががんばってるからだよ。練習、いつもまじめに取り組んでるもんね」
「そんなことないです。これは師匠のおかげです」
　かたくなにそう言う。
　自分のことを慕ってくる妹弟子の存在はただただ嬉しく、英雄も笑顔になる。特に意図することもなく、自然と英雄の手が明日香の頭に置かれ、優しく撫で始めた。
「明日香なら強くなれるよ。がんばろうな」
「は、はい」
　顔を真っ赤にして、されるがままに頭を撫でられていく少女。
　英雄を見上げた彼女の瞳はトロンと溶けていた。

　＊

　練習が続く。
　明日香はまじめに練習に励み続けた。
　けれども、やはり教室内で一番弱いのは明日香だっ

た。
　試合ではいつも明日香が負けた。
　残酷な男子たちは、弱い明日香のことを痛めつけて、締め落としてしまうこともあった。特に明日香と同い年の少年が彼女のことを目の敵にしていて、試合ごとに明日香を締め落としては勝ち誇っていた。
「こら聡、加減をしろと言ってるだろ」
「うるせえ。弱いこいつが悪いんだよ。弱い奴は強い奴に従うべきなんだ」
「なに言ってるんだ。明日香はまだ始めたばかりなんだから、手加減してやらないとダメだろう」
「くそっ。なんだよ、こいつのことばっかり特別扱いして」
　ふてくされたようにして、どこかへ行ってしまう聡。
　英雄はやれやれと明日香の介抱をして、彼女が意識を取り戻すのを待った。
　これが日常茶飯事だった。
　明日香は何度も締め落とされた。
　けれども、けっしてブラジリアン柔術教室を辞めようとはしなかった。
　一生懸命に練習に励んでいく明日香。
　英雄はそんな明日香のことをほほえましく思い、ますます熱を入れて明日香のことを指導していった。

　＊

　英雄の中学３年生の冬。
　ブラジリアン柔術と柔道を続けていた彼だったが、高校からは柔道一本で勝負をすることにした。
　高校の推薦を柔道でとったからだ。
　もちろん、ブラジリアン柔術への未練もあったが、その高校は全寮制の学校で、柔道部の練習に明け暮れながらブラジリアン柔術の練習をすることはできそうになかった。だから、英雄は長年通っていたブラジリアン柔術教室にも来れなくなる。それは明日香との別れも意味していた。
「さびしいです」
　明日香が涙目になりながら言った。
　それは英雄にとってなつかしい姿だった。
　明日香が教室に入ってきた時に浮かべていた表情。数年が経過し、男子に締め落とされても泣かなくなった明日香が、その瞳に涙をためて英雄のことを見上げている。
「……明日香、がんばります」
　それでも気丈に、小柄な少女が言った。
「がんばって、それでこの教室の誰よりも強くなってみせます」
　覚悟をきめた明日香の顔。
　それを見下ろした英雄は誇らしい気持ちになり、彼女の頭に手を置いて、撫でた。
「ああ、明日香ならできる。がんばれ」
「はい」

元気よく返事をした明日香。
それが彼女との別れになった。

２

高校時代の英雄は無双した。
１年の時から大会に出て、インターハイでも好成績をおさめた。
誰よりも練習に励み、誰よりも技術を高めていった。
身長は中学時代の１６０センチメートルのまま。
柔道をやる人間としてはかなり小柄な部類である。
けれども、英雄はそのハンデをものともせず、練習に励み、県内では敵なしの猛者として名をはせていた。
小柄な体格をめいいっぱいにつかって、相手を翻弄して、投げる。
特にブラジリアン柔術をやっていた影響からか寝技が得意だった。
柔よく剛を制す。
その言葉を体言する存在として、英雄は自分よりも大きく、体重だって倍以上ある相手にも遅れをとることはなかった。高校３年の大会ではついに優勝し、団体戦でも大将として君臨して、団体戦優勝まで果たした。大学でも柔道をやるつもりで、はやくも推薦で都内の名門大学への入学を決めていた。
まさに順風満帆。
そんな３年生の秋のこと―――突然、ブラジリアン柔

術教室の師範から連絡を受けた。

＊

「久しぶりだな」
喫茶店。
英雄が店に入ると師範はすでにコーヒーを飲んでいた。
大柄でいかつい大人の男だ。
眼光が鋭くて、こうして近くにいるだけで威圧感を覚える。その様子は３年前と変わらなくて、英雄は自然と背筋が伸びた。
「お久しぶりです。師範」
「ああ。英雄の活躍は見ていたよ。すごいな」
「そんな」
師範にほめられて、胸を熱くさせる英雄。
ブラジリアン柔術の世界大会で入賞したこともある男からの言葉は、英雄にとって素直に嬉しいものだった。
「それで、今日は何かあったんですか？」
「うむ。そうなんだ」
師範はそこでコーヒーにもう一度口をつけた。
ゆっくりと咀嚼するように飲んでいる。
何か言いにくそうにしている。それが英雄にも分かった。
「今度、ブラジリアン柔術協会の世界戦がある」
「はい、確か師範も参加されるんですよね」

「うむ。それで頼みごとがあるんだ」
「頼みごと？」
　どういうことだろうか。
　疑問に思った英雄に対して、師範が、
「大会は外国で行われる」
「そうなんですか」
「ああ、おそらく１ヶ月ほどは向こうに滞在することになるだろう」
「はい」
「その間、英雄にブラジリアン柔術教室の師範代を頼めないか？」
　英雄は目を丸くして驚いた。
　自分はブラジリアン柔術の練習をしなくなって３年のブランクがある。その間はずっと柔道の練習に明け暮れていた。そんな自分に師範代なんてできるわけがない。そう思ったのだ。
「おまえの強さは分かっている」
「師範」
「おまえの試合も何度かみた。寝技には柔術の技術が使われていた。なんの問題もない」
「ですが、」
「うちの道場を任せられるのは英雄しかいないんだ。後生だ。頼まれてくれないか」
　そう言って、師範は頭を下げた。
　それを見て、英雄はうっとうめく。
　師範に頭を下げられるなんて初めてだった。熱いもの

を感じた英雄は腹を決めた。
「分かりました。やらせてもらいます」
「本当か？」
「師範の頼みですからね。俺でよければ、お力になります。ちょうど、部活も引退式を終えたばかりですから、大学に行くまで時間もありますし」
「そうか」
　ほっとした様子の師範。
　しかし、どこかそわそわとした落ち着きのない様子が見受けられた。こんな師範を見るのは初めてで、やはり英雄は面食らってしまった。歯切れが悪そうに師範が口を開く。
「英雄、明日香のことは覚えているか？」
「明日香？　ああ、もちろんです。あの子はまだ教室に通ってるんですか」
「……ああ、通ってる」
「そうですか。練習熱心だったあの子のことだ。だいぶ実力をつけたんじゃないですか？」
「……そうだな。強くなった。いや、強くなりすぎた」
「え？」
　師範の声がよく聞こえなかった英雄が問いかける。
　それを無視する形で、師範が真剣な表情で言った。
「明日香のしてることを止めるな」
「ど、どういうことですか」
「そのままだ。行けば分かる。理解する。けれど、明日香のしていることだけは止めるな」

真剣な表情。
そこにさらなる質問を向けることはできなかった。
英雄は気圧されてコクリと頷いた。
その選択が、自分の人生を変えてしまうことになるとも知らずに。

３

部活は引退していたので放課後は暇だ。
英雄はさっそく次の日に道場に向かうことにした。
「変わらないな、ここは」
郊外の住宅ひとつ建っていない一角にある道場。
看板にはブラジリアン柔術の言葉と、協会に所属していることが分かるマークがつけられているだけの簡素なたたずまいだ。
まさに、質実剛健。
強さを追い求めた戦いの場所がそこにはあった。
「さっそく入るか」
建物内へ。
かって知ったる我が家とばかりに更衣室に向かい、ブラジリアン柔術の道着をひっぱりだした。
中学時代から体格は変わっていなかったので、その道着はすんなりと体にフィットした。
「なつかしいな」
初等部の頃から着慣れた道着。
それを身につけるといつでも初心に戻れる気がした。

背筋が自然と伸びて、心が澄み渡る。ああ、戻ってきたんだなと、英雄は感慨深く思った。
（それにしても、師範のあの言葉はどういうことなんだろうか）
　英雄は昨日から疑問に思っていた。
　師範の言葉。
　明日香のやっていることを止めるな。
　その意味が分からず、英雄としては困惑するしかなかった。けれども、道場に行けば分かるだろう。久しぶりの道場。そして、久しぶりの明日香との再開だった。彼女がどれだけ強くなっているのか、兄弟子として楽しみでもあった。
「行ってみよう」
　英雄はウキウキした気持ちで、道場に向かった。

　＊

　更衣室から離れたところ。
　そこに、レスリングの試合会場を思わせる空間があった。
　かなり広く、試合をするのにも、練習をするのにも十分なスペースが広がっている。
　日夜、男たちの熱い熱気が繰り広げられていた聖域。強さを求め、毎日のように大勢の男たちがトレーニングに励んでいる場所。
　そこで英雄は信じられないものを見た。

「え？」
　最初、理解できなかった。
　道場の中央。
　そこで、大柄な女性が男の首を締め上げ、宙づりにしていた。

「は？」
　女性はかなり背が高かった。
　少なくとも英雄とは比べものにならないほど高い身長であることは間違い。しかも、身長だけではない。それ以外のいろいろなところが大きかった。
（で、でかい）
　胸。
　道着からこぼれおちそうになっているおっぱいが、英雄の視界に飛び込んでくる。
　さらには下半身の充実具合もけたはずれだった。その女性は下半身の道着をつけていなかった。そのせいで、彼女のムチムチかつ強靭な太ももが惜しげもなくさらされている。信じられないくらいに長い足。それを支える鍛え上げられた太ももとふくらはぎにはうっすらと筋肉がのっていて、見ているだけで圧倒されるくらいだった。
「ぐげえええええッ！」
　断末魔。
　それは女性に締め上げられている男があげているものだった。
　その顔には見覚えがあった。青年部で働きながら格闘技をしている男。それほど強いわけではないが、毎日まじめにトレーニングをしていた人だった。そんな成人男性が、手も足も出ずに女性に首を締められ、吊るされていた。
　吊るされている。

　その言葉どおりだった。
　男性の足は床についていない。首を締められ、宙づりにされているのだ。しかも、女性は片手一本で男の首をわしづかみにしていた。彼女は片手だけで成人男性を持ち上げ、その首を締め上げているのだ。
「ぐげえええええッ！」
　苦しんでいる。
　顔を真っ赤にして、舌を飛び出させて、涙をぽろぽろ流しながら苦しみ続けている。
　男は自分の首を絞めている女性の手をつかんで、なんとかそこから脱出しようと必死だった。足をバタバタと暴れさせて、女性からの首締めから逃れようと滑稽に暴れまわっている。
　しかし、無駄な努力だった。
　男がどんなに暴れようが、女性はビクともしなかった。泰然と二本の足で立ち、ぶれることもなく片手で男を吊るして、締め上げていくだけ。
　ピクピクと痙攣が始まる。
　じたばたと暴れていた足が弱々しくなっていく。そして、男の両手がガクンと下に落ちた。墜ちたのだ。宙づりにされたまま、男は気絶してしまった。
「あは、よわっ」
　弾むような声。
　幼い。
　そう感じさせる声だった。
　その声には聞き覚えがあった。

　どこだろう。
　英雄は疑問に思う。
　その女性。
　いや、少女。
　英雄は彼女の顔をその時はじめて見上げた。
　かなり幼い。
　体は大きいのにその顔立ちは無邪気そのものに見えた。男を片手だけで締め落としたというのに、そこにはニコニコとした純粋無垢な笑顔しか浮かんでいなかったのだ。
　しかし、この顔―――。
　どこかで見たことがあるような……。
　そんな具合に英雄が困惑していると、少女が英雄に気づき、満面の笑みになった。
「師匠っ！　きてたんですね！」
　無邪気に喜んだ少女。
　彼女はつかんでいた男の首を投げ捨てると、そのままこちらに歩いてきた。
　その顔立ち。
　その声。
　なにより、師匠という言葉。
　そこでようやく、英雄は目の前の少女が誰であるか思い至った。
「あ、明日香か？」
「そうですッ。お久しぶりです、師匠」
　笑顔で明日香はそう言った。

英雄はそんな彼女のことを見上げるしかなかった。
自分よりも格段に背が高い妹弟子。
肩幅も、体の分厚さも、その筋肉量だって自分よりも勝っていることが一目で分かる成長しきった肉体。英雄は呆然として、成長した明日香のことを呆けた顔で見上げ続けた。